

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007 年度～2008 年度  
 課題番号：19520394  
 研究課題名（和文） 『図書寮本類聚名義抄』凡例の構築

研究課題名（英文） Making an introductory for a Japanese old dictionary  
 “Ruijomyogisho”

研究代表者

大槻 信 (Otsuki Makoto)  
 京都大学・大学院文学研究科・准教授  
 研究者番号：60291994

研究成果の概要：

膨大な情報がコンパクトにおさめられた工具書としての「辞書」は様々なルールに則って作られている。そのルールを知らなければ、本当の意味で使うことはできない。それは平安時代の辞書についても同様である。平安時代の辞書として最重要と言える図書寮本類聚名義抄は、一部分のみの残存という事情もあり、「凡例」を欠いている。本研究は、先行研究と本文研究を活用しながら、その凡例を構築したものである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1400000	420000	1820000
2008 年度	1500000	450000	1950000
年度			
年度			
年度			
総計	2900000	870000	3770000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：国語学・古辞書

#### 1. 研究開始当初の背景

原撰本系類聚名義抄の唯一の伝本である図書寮本類聚名義抄（院政期初期成立、法部一帖の零本）には凡例がない。しかし、辞書という工具書はもっとも凡例を必要とする書物群である。実際、改編本系の観智院本類聚名義抄には、凡例と見なせる部分が附されている。

辞書には「編纂にさいしての工夫や約束事、略号などの使用が多い」（木島史雄、『『経典積文』の著述構想とその変用の構図』、東方学報（京都）、71、1999 年：168）。辞書は膨大な情報をコンパクトにおさめる必要があ

る。また、辞書は引いて利用できなければ意味がない。そのため、辞書は様々なルールに則って作られている。そのルールを知らなければ、本当の意味で使うことはできない。

日本の古辞書について、研究代表者は、かつて以下のように指摘したことがある（「平安時代の辞書についての覚書」、大槻信、『國文學』（学燈社）、第 50 卷 5 号 日本語の最前線、2005 年）。「辞書は種々の決まり事の上に立って記述されている。それらの決まり事を知らなければ十分に活用できない。（中略）辞書を正しく利用するためには、何よりもまずその序文を読む必要がある。序文は同時に

凡例としての機能も担うことが多い。『新撰字鏡』には序・跋があり、『倭名類聚抄』にも序文がある。『類聚名義抄』も観智院本に凡例と見なせる部分があり、『色葉字類抄』にも短い序文がある。しかし、その序文の記述のみで、それらの辞書を正しく利用できるわけではない。研究の蓄積を反映した凡例の作成が必要であろう。序文の読解と、実際の辞書の体例から帰納された、コンパクトで行き届いた凡例があれば、各辞書の利用に大きな便宜がある。例えば、序文・凡例を欠く図書寮本類聚名義抄について、それを構築してみることは魅力的な研究課題ではなからうか。」

最後に述べた図書寮本類聚名義抄の凡例を作成することが本研究の課題であり目的である。どのような凡例があれば、図書寮本類聚名義抄を正確に利用できるだろうか。存在しない凡例を構成してみたい。

現在、図書寮本類聚名義抄は所蔵機関(宮内庁書陵部)において修復が完了し、原本調査が可能となっている。また、宮澤俊雅「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」(『小林芳規博士退官記念国語学論集』、1992年)をはじめ、凡例作成のために利用可能な研究の蓄積がかなりある。このような事情を踏まえ、現在が、この研究を推進する上で、最も意味があり、かつ最適な時期であると考えられる。

研究代表者は、図書寮本類聚名義抄に関して、過去に論文「図書寮本類聚名義抄片仮名和訓の出典標示法」(大槻信、国語国文、第70巻第3号、2001年)ならびに「辞書と材料——和訓の収集——」(大槻信、『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』、2005年)を発表した。また、科学研究費補助金・若手研究B、2003-04年度、「古代辞書の研究——『図書寮本類聚名義抄』片仮名和訓を中心に——」において、和訓の出典を中心に研究を行った。今回、問題を和訓から辞書全体にひろげ、図書寮本類聚名義抄の本格的な利用に備えたい。また、研究代表者は、2005年度・2006年度の京都大学における授業(特殊講義)でも図書寮本類聚名義抄の凡例の問題を取り上げている。

## 2. 研究の目的

図書寮本類聚名義抄の凡例を作成することが本研究の目的である。書誌、注文の構成、項目の配列、略字・符号、出典など、あらゆる情報を完備した凡例を作成したい。

加えて、誰が、いつ、なぜ、どのような材料を使って、どのようなやり方でこの辞書を作ったのか、また、どのような目的で使用するために作ったのか、といった序文に必要な情報をも含み込むことを目標とする。

## 3. 研究の方法

凡例の一項目である出典略号を例にとる。出典略号については、まず出典を特定することが必要であり、さらには各出典についての解説・研究史・テキストなどの情報を伴った一覧が作成されることが望ましい。ただし、ゼロからそれを作り上げる必要はなく、すでに相当量の研究の蓄積がある。索引として、橋本不美男「図書寮本類聚名義抄出典索引」(『書陵部紀要』1、1951年)、築島裕・宮澤俊雄「図書寮本類聚名義抄仮名索引・出典別索引」(『図書寮本類聚名義抄』勉誠社、1976年)があり、研究として、吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷(上)(中)(下一)」(『訓点語と訓点資料』2、3、5輯、1954-55年)等がある。さらにこれらを踏まえ、池田証寿による出典略注と索引がある(池田証寿「図書寮本類聚名義抄出典略注」、古辞書とJIS漢字、3、2000年ならびに池田証寿「図書寮本類聚名義抄出典索引」、古辞書とJIS漢字、4、2001年)。しかし、先行研究によって全てが明らかにされているわけではない。したがって、これまでの研究の整理と未解明部分の調査・研究は同時に進められなければならない。

凡例作成のために必要となる作業工程は次の通りである。

### I 基礎知識の獲得と整理 問題点の把握

- 基礎的文献(辞書・事典、概説書)の整理(これが凡例の礎となる)
- 日本における辞書の歴史
- 類聚名義抄について
- 図書寮本類聚名義抄について
- 図書寮本類聚名義抄テキストの具体的な一部分の研究

### II 先行研究・論文の収集

- 論文リストの作成
- 論文の収集
- 先行研究の整理。
- 研究史の整理。何がどこまで明らかにされているのか。内容・テーマごとに整理。

### III 辞書の凡例 凡例とは何か?

- 新撰字鏡 序跋
- 倭名類聚抄 序文
- 観智院本 凡例
- 現代辞書の凡例

### IV 図書寮本の凡例 図書寮本の凡例に必要な要素は何か?

- 凡例として必要な要素の一覧を作成する。
- その一覧をジャンルごとに整理する。
- 序文に必要な要素を考える。

### V 凡例の作成

- 第一次凡例の作成。
- フィードバック。(その凡例を使って図書寮本類聚名義抄を読む)
- 第二次凡例の作成。
- 例外の処理。
- 第三次凡例(完成稿)の作成。

#### 4. 研究成果

##### ●2007年度

2007年度は以下のような研究・準備作業を行った。

① 基礎的文献(辞書・事典、概説書)を電子化して、整理した。  
凡例作成の基礎情報として、辞書・辞典類ならびに解題に見える図書寮本類聚名義抄に関する記述を全てデジタル化した。該当書は以下のようなものである。

『国語学辞典』(東京堂 1955)、『国語学研究事典』(明治書院、1977)、『国語学大辞典』(東京堂出版、1980)、『日本古典文学大辞典』第6巻(岩波書店、1985)、『漢字講座2 漢字研究の歩み』(明治書院、1989)、『日本古辞書を学ぶ人のために』(世界思想社、1995)、『日本辞書辞典』(おうふう、1996)、『漢字百科大事典』(明治書院、1996)、『訓点語辞典』(東京堂出版、2001)、橋本不美男 1950.00 図書寮本類聚名義抄解説『図書寮本類聚名義抄』 宮内庁書陵部、築島裕 1976.11 国語資料としての図書寮本類聚名義抄『図書寮本類聚名義抄』 勉誠社

② 図書寮本類聚名義抄テキストの具体的な一部分についての研究を行った。凡例の具体的なイメージを得るため、一部分を詳細に研究し、凡例項目として必要になる要素の概要を得た。

③ 先行研究・論文の収集と整理を行った。300本に及ぶ研究論文リストを作成し、そのすべてを収集した。コピー可能なものはコピーを作成し、発表年代順にファイリングしてある。

④ 研究史を整理した。何がどこまで明らかにされているのか。内容・テーマごとに整理を行った。

⑤ 辞書の凡例について考察するため、他の古辞書の序跋・凡例(新撰字鏡序跋、倭名類聚抄序文、観智院本凡例)などを研究した。

⑥ 図書寮本類聚名義抄の凡例として必要な要素の一覧を作成した。

⑦ 凡例の作成に着手した。

以上の通り、本年度は、凡例作成のための準備作業を完了し、凡例の前半を完成した。

##### ●2008年度

2008年度は作業工程の後半(図書寮本の凡例項目作成・凡例の作成)を実施した。具体的には、以下のような作業・研究を行った。

- ① 図書寮本類聚名義抄の凡例として必要な要素の一覧を作成する。
- ② 序文に必要な要素を列挙する。
- ③ それらの一覧をジャンルごとに整理する。
- ④ 第一次凡例の作成。
- ⑤ フィードバック。(その凡例を使って図書寮本類聚名義抄を読む)
- ⑥ 第二次凡例の作成。
- ⑦ 例外の処理。
- ⑧ 第三次凡例(完成稿)の作成。

以上の通り、本年度は、凡例を一通り作成しおえた。ただし、⑤⑥⑦⑧については、まだ全体が完了しておらず、第二次凡例・第三次凡例まで稿を重ねた部分は一部にとどまる。さらに調整・統合・調査・推敲を行い、最終的には、2010年度中をめどに、研究成果を論文として公表する予定である。出来上がった凡例は、図書寮本類聚名義抄を利用する際に常に参照される手引きとして今後重要な役割を果たすであろう。

以下に、凡例項目の一覧と冒頭部分(1-1-1)を引く。

-----

#### ■■【凡例項目一覧】■■

##### ■1 概要

- 1- 1 図書寮本の解題
  - 1 書誌的事項
  - 2 編纂目的
  - 3 図書寮本の特質
  - 4 日本の辞書史における図書寮本の位置づけ
- 1- 2 改編本系諸本との比較
- 1- 3 図書寮本類聚名義抄の研究史

##### ■2 部首

- 2- 1 採録部首について
  - 1 採録部首一覧(目次の形で)
  - 2 玉篇の項目との関係性
- 2- 2 部首内部の文字配列の規則

##### ■3 項目及び見出し語

- 3- 1 項目全体
  - 1 見出し語・注目の体裁
- 3- 2 見出し語
  - 1 見出し語の出典
  - 2 見出しの熟語中の被注字の規則
  - 3 見出し語数

##### ■4 注文

- 4- 1 注文の構成
  - 1 注文の配列
- 4- 2 表記に関する注意事項

- 1 略字一覧
- 2 漢文注の表記方法
- 3 和文注の表記方法
- 4 記号に関する説明
- 5 書き入れ・訂正の記入方法
- 4- 3 出典について
  - 1 出典一覧と解説
  - 2 出典名無表記の場合
  - 3 出典の利用頻度
  - 4 出典の優先順位
- 5 具体的に一～二項目をよみとく
- 6 参考文献、索引など

-----

■■【冒頭部分（1-1-1）】■■

■■1-1-1 書誌■■

■書誌

- 宮内庁書陵部現蔵(図書寮、番号 62927、冊数 1、函号 503 212)
- 装幀 粘葉装。
- 員数 一帖。法部前半のみの零本。全体は六帖か<sup>2</sup>。
- 料紙 楮斐混漉紙<sup>3</sup>。
- 寸法 縦二七・七糎、横一六・七糎。
- 丁数 1 7 3 丁<sup>4</sup>。
- 表紙 共紙表紙(素紙、原表紙)。
- 印記 なし。(表紙見返に方形単廓朱印「図書寮印」のみ)
- 題 内題「類聚名義抄 法」。外題・尾題なし。
- 界 押界。一面八罫五線(七行四段)、一面二十八画。見出語(掲出項目)は画の一番上から大字で書き始め、注文はその下に細字二行の割注で書くのが原則。一画には大字約四文字をおさめることが可能。注文末尾に位置する片仮名和訓や和音注は、

1 この項目については、主として、橋本不美男 1950「図書寮本類聚名義抄解説」(『図書寮本類聚名義抄』、宮内庁書陵部)を参照せよ。

2 六帖が通説。訓点語辞典 2001:178「完本としては仏・法・僧それぞれ上・下の六帖であったと推定される」。一方、橋本不美男 1950 は「本帖原表紙(一頁)右上に「五」といふ数字が朱書されてゐる」ことを根拠に、「佛四分冊、法二分冊、僧三分冊」の全九冊であった可能性を指摘する。「五」については築島裕が函番号と考えることも可能であることを指摘(小松英雄 1971: 239)。

3 橋本不美男 1950 による(「厚手の楮斐混漉の紙を用ひた」)。

4 「墨付は両面書写の三四二頁、総丁数は一七三葉、随つてその全紙数は八六枚及び表紙に用ひられた半紙一枚からなる。」「本帖には一枚の佚脱もないことが判明する。」(橋本不美男 1950)

それ以前の漢文注からやや離れ、画の左下近くに記されることがある<sup>5</sup>。

●改頁 部首が変わる毎に改頁<sup>6</sup>。他は基本的に追い込み。

●識語 書写識語なし。表紙見返に以下の識語あり。

「此書不可出経蔵外、若有其志／之人、臨此砌可令披覽、非是／慳恡之義、只為護持正法也」

●書写年代 院政期ごろの書写か<sup>7</sup>。成立年代については 1-1-3 参照。

●本文 漢文、万葉仮名和訓、片仮名和訓。注記あり。

●訓点

朱 フコト点(喜多院点<sup>8</sup>、院政期～鎌倉)。

朱 声点(院政期～鎌倉)。

朱 注記(院政期～鎌倉)<sup>9</sup>。

●後筆・補入 複製本二〇九～二一二頁の一枚は補入、別筆。ただし、年代的にはさ

5 和訓のみが引かれる単字掲出項目では、和訓は必ず割注左に書かれ、割注右は空白。注文の記載位置については小林恭治 1992.09・1994.06 参照。

6 山部のみ例外(一三五六)。「一三五六」は複製本(勉誠社)での位置(135 ページ 6 行目)を示す。

7 橋本不美男 1950「平安末から鎌倉初期にかけての書写」。日本辞書辞典 1996「院政期ごろ写」。訓点語辞典 2001:178「平安時代院政期一一〇〇年頃成立、ほど遠からぬ頃書写の漢和辞書」。

8 法相宗所用。第二群点。

9 橋本不美男 1950 に「尚最後に附言したいことは、本帖には鎌倉室町期とおぼしい朱点朱注が施されてゐるが、その中に「音(百一)」「一二六頁)以下処々に「百卅」「一二九頁)、「二三五」「一四五頁)、「三五二」「一五六頁)、「四九七」「五百七」等数字の注があつて、それが何を意味してゐるかは今のところ分りないが」という。

山田忠雄 1955「漢数字の書法 ——文字論のための おぼえがき」(日本大学文学部研究年報、第 6 輯)により、漢数字は玉篇の部首番号であることが明らかにされた。記入の時期について、「入紙二枚の 部分の 異筆とはなはだ ちかく、あるいは 同一人の 手跡に かかる ものではないかとさへも 想像される。」と述べ、図書寮本書写時期に近く、「要するに、本文を 平安末書写とみて、これらは 一様に 鎌倉期初期に かきくはへられた ものと みるのが 至当ではあるまいか。」と結論づける。

この漢数字記入の意味については池田証寿 1995.09「図書寮本類聚名義抄に見える漢数字の注記について」参照。「図書寮本類聚名義抄に見える玉篇の部首番号は、玉篇部首が名義抄にないため名義抄の他の部首に所属する漢字の中で、特にその所属部首が分かりにくい漢字について、その同定を確かなものとするために、図書寮本類聚名義抄の撰者がその編纂の過程でほどこした注記であると考えられる。」と述べる。

して降らないという<sup>10</sup>。

●書体の特徴 『漢字講座2 漢字研究の歩み』1989「書体は能筆で端正に書かれているが、仮名には古体が多く、漢字には偏旁を省いた省字体、俗字、二合字や草体が頻用されるので利用には些少の習熟が要求される」。略字については4-2-1参照。

#### ■残存部分

法部前半の零本<sup>11</sup>。合計20部首（篇目による）。観智院本の「法上・法中」全体に対応<sup>12</sup>。

部首配列は改編本系諸本と同じ。

本文第一紙表に篇目頌がある。

#### ■伝来・所蔵

某寺院旧蔵か（識語に「此書不可出経蔵外」とあり）。

清水谷家<sup>13</sup>旧蔵。（某寺院より清水谷家への伝来については時期も事情も不明。）

宮内庁書陵部（旧図書寮）現蔵。1948年10月に清水谷家より移管。

書陵部『図書寮本類聚名義抄』覆製本刊行（1950年）によって世に知られる。

#### ■修復

虫損が甚だしく、書陵部への移管直後の1948年頃に修理が行われた<sup>14</sup>。

<sup>10</sup> 橋本不美男 1950「その内コロタイプ版（本書）の二〇九一〜二二頁にあたる一枚は、同紙質の入紙であり、別筆らしいが年代的にはさしてはなれたものでない。凡そ平安末から鎌倉初期にかけての書写であらう」。山田忠雄 1955「漢数字の書法——文字論のための おぼえがき」（日本大学文学部研究年報、第6輯）は入紙部分を鎌倉初期の書写とみる。宮澤俊雅は「図書寮本類聚名義抄撰者は本文を別人に清書させた上で、声点、句読点、傍訓、漢数字の注記等の朱筆を加えて行ったのであり、入紙は撰者自身が書き落としを補ったもの」（池田証寿 1995.09:29）と見る。

<sup>11</sup> 類聚名義抄の完本は改編本系の観智院本のみ。観智院本は仏・法・僧の三部にわかれ、全11帖（篇目、仏上、仏中、仏下本、仏下末、法上、法中、法下、僧上、僧中、僧下）、120部首。

<sup>12</sup> 図書寮本は観智院本の部首番号41〜60に相当する。図書寮本は部首番号48「面」・49「歯」・53「色」の本文を欠く。改編本系諸本の対照は1-2参照。

<sup>13</sup> 清水谷家（しみずだにけ）は本姓藤原氏。羽林家。北家閑院流。西園寺庶流。家業は書道、笙、能楽、神楽。居所は新在家御門内下ル東側。

<sup>14</sup> 修理以前に作成された複製本（書陵部、初版）にくらべ、117箇所（文字）が読めるようになった（書陵部、再版以降）。遠藤諦之輔 1987.06『古文書修補六十年 ～和装本の修補と造本～』汲古書院、口絵3、本文208-210参照。

橋本不美男 1950:28, 69-70, 71 に修理によって判読可能になった部分をあげる。

-----（以上、凡例冒頭部分）

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1件）

- ① 大槻信、「訓点資料入門」、奈良女子大学 21世紀 COE プログラム報告集、Vol.26、16-31・51-78、2009年、査読無

〔図書〕（計 3件）

- ① 小川千恵、阿川佐和子、大槻信他、『高山寺』（古寺巡礼 京都 32）、淡交社、総頁142、担当：口絵カラー解説17-80・高山寺の寺宝127-136、2009年
- ② 共著（京都大学国文学研究室・中国文学研究室編）、『室町前期 和漢聯句作品集』、臨川書店、総頁325、2008年
- ③ 共著（高山寺典籍文書綜合調査団編）、『高山寺経蔵典籍文書目録完結編』、汲古書院、総頁580、2007年

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

大槻 信 (OTSUKI Makoto)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：60291994